

成田
歴史
玉手箱

36回

歴史と伝統文化の
まち・成田。市内に
は、歴史ある文化財
が多数あります。



除幕式に駆けつけた新山莊輔博士の親族

「日本獣医学の生みの親」と称され、三里塚の発展に大きく寄与した新山莊輔博士は、古き御料牧場を知る人々にとって忘れることのできない人でした。安政3年(1856)山口県に生まれ、明治18年(1885)から欧米に渡り各国の畜産業の視察と研究に没頭。このとき憲法制定準備で渡欧中の伊藤博文一行と会い、通訳や翻訳の仕事にあたり、のちの大日本帝国憲法制定に一役を担ったものでした。

新山博士は、明治21年から大正11年までの34年間、第五代下総御料牧場長の要職にありながら、牧場用地の一部を県営鉄道多古線・八街線敷設用地に無償で県に貸し付けたり、退職金の一部を当時の遠山村に寄付し「新山賞」として成績優秀な小学生に奨学金を贈るなど、三里塚地区の公共事業や教育にも力を注ぎました。大正13年、馬事団体関係者や地元有志によって、現在のJR三里塚バス停付近の一角に、彫刻家池田勇八制作の銅像が建立されました。しかし、太平洋戦争時の金属供出によって銅像は撤去され、台座だけがひっそりと残されていました。

こうした中、かつての新山さんの銅像や功績を知って育った人々から「自分たちが生きている間に銅像を再建したい」との切なる願いがわき起こり実行委員会が発足。ところが、再建資金や台座移転にかかわる用地交渉、かつての銅像写真の発掘など難問が山積。幸運にも新山家に原型

写真が残されており、これを契機に彫刻家田畑功氏に像の復元・制作を依頼するなど本格的な活動が開始されました。実行委員会の地道な努力は大勢の賛同を得、総額845万円もの寄付金が集まり永年の願いが実現しました。

桜吹雪が舞い散る中行われた4月11日の除幕式には、全国各地から駆けつけた新山家一族50人が三里塚の地で再会。銅像再建関係者、かつての御料牧場ゆかりの人や新山賞受賞者など220人が出席。そして主人の帰りを待ちわびていた台座に、カイゼルひげをたくわえステッキ姿の新山博士像が60年ぶりによみがえりました。

再建のきっかけとなった池田勇八作の原型写真。右後方は新山場長本人(新山春一氏所蔵)



三里塚御料牧場記念館の前庭に建つ新山莊輔博士の銅像

60年ぶりに再建
三里塚の住民や親族の願いがかなない

新山莊輔博士の銅像

編集後記

屋外で行う催しで、関係者が一番頭を悩ますのが当日の天気ではないでしょうか。晴れるか雨かで、その催し物が盛会で終わるか否かは決まったようなものです。今回大きく取り上げた50周年記念の山車祭りの日は、雲一つない晴天

で、まさにお祭り日和。市役所庁舎前の出発式会場は、多くの見物客と引き手の若衆の笑顔であふれ返りました。何より、こうして紙面で紹介できるのも晴天の成せる業。天気が気になるのは広報マンも同じです。